

天満宮安楽寺と筑後国水田荘

中世の太宰府天満宮は、天満宮安楽寺と呼ばれていました。天満宮安楽寺は一般的な大寺社と同じく、荘園領主としての性格を持っていた。安楽寺領の荘園は、太宰府が位置する筑前国に限らず、北部九州一帯に点在していました。

その中のひとつが、筑後国水田荘（現・福岡県筑後市）です。水田荘は、13世紀末には史料上に名前が現れます。水田荘の大きな特徴は、安楽寺の現地における事実上のトップであった留守職を代々務めた家のひとつである大鳥居氏が、水田荘、中でも南嶋村（本村とも）を中核的な所領としていたことです。さらに、大鳥居氏は南北朝時代以降、水田荘内に在住するようになったとされています。大鳥居氏と水田荘の結びつきは、きわめて強いものであったといえるでしょう。

ところで大鳥居氏は、留守職をめぐり、大鳥居氏内部や、小鳥居氏などの他の社家と対立を繰り返していました。水田荘は、こうした対立の中で頻繁に登場します。



～公文書館だより⑪～

14世紀末、大鳥居氏の祖である大鳥居信高が亡くなって以降、信高の息子たちの間で、継承者の地位をめぐる対立が起こっていたことを、徳永健太郎氏が明らかにしています。最終的に、信高の孫である亀松丸（後の信栄）が水田荘南嶋村などの信高遺領を相続しますが、亀松丸を支援したのは、当時の室町幕府九州探題・今川了俊でした。徳永氏の研究によると、了俊は、安楽寺を統括していた京都の菅原氏を協力させる形で、他の社家を排除して亀松丸を支援し、安楽寺への介入を強めたようです。

その過程で、康暦2（1380）年秋ごろに、了俊が菅原氏に対して、亀松丸が水田荘南嶋村の管理権を剥奪されたことを抗議したとみられる書状が残されています。この中で、水田荘の領有が問題になったこと自体が、大鳥居氏にとつての水田荘の重要性をうかがわせます。これ以降、水田荘と安楽寺をめぐる情勢に、武家権力が徐々に介入を強めていくのです。

太宰府市公文書館 児玉 良平